

9月1日(日)

北海道産

塩

さんま

新物

1匹

380(税込)円

西田鮮魚店 072-5246

御用聞き便専用番号 090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達) 御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

暑さも少しずつ和らぎ、朝晩がだいぶ涼しくなってきましたね。最近お客様から「今年は秋刀魚が安く入るんじゃない？」と質問されるのですが、市場で探してみるのがそういった情報は、見つからず…。無ければ無いで気になり、気付けば自分自信が食べたくてしょうがなく、ついに市場を歩いていると！奥原君、新物の塩秋刀魚入ったよ」と私の心を読んだかのようなタイミングでした。サイズが少し小さいが、新物：秋刀魚：食べたい。下さい！最後は、自分の欲に負けてしまいました(笑)。

少しサイズが小さいが新物！今日来てくれるお客様喜んでくれるかな？買って貰えるかな？と考えていると、いつも会長から耳にタコができるほど言われていた売りたいものを売れ！という言葉が思い出した。

上手くは表せないが、仕入れをしながらお店に帰ってからの皆さんの事を想像し、ドキドキワクワクしている自分がいる。もしかしてそういう事なのか！と1人納得し、早速広告で使いたいと交渉を始める。お店に帰り店長に伝えると、さすが仕入れ番長の祐宗さん、すぐに私の探したサイズよりも更に大きなサイズを見つけてくれた。

今回は、生秋刀魚ではなく塩秋刀魚ですが、新物なので焼いてもパサパサせずにふつくらしておきます！私も一足先に家族と頂きましたが、やはり日本人のソウルフード！高価なものとなり手が届きにくくなりましたが、心を満たしてくれる味です。ちなみには私は、最後によく焼けたしつぽをカリカリと食べるのが好きです。皆さんにもこだわりの食べ方ありますか？有れば是非今度、奥原に聞かせてください！

西田鮮魚店 主任 奥原 歩久斗

# 『鮮コーポレーションの写真集Ⅰ』

みや かくたか お  
宮角孝雄さん



鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史

4月21日の広告の裏面から、鮮コーポレーション株式会社の写真集を掲載してきました。

この写真集は令和二年、私の68歳の誕生日に、社長職を息子の龍一に譲り、会長に就任するのを期に作りました。

当初は新人社員の募集にあたっての会社案内を作ろうというところから始まりました。会社案内というと、仕事のやりがいを語り、スタッフの笑顔がいっぱい散りばめられた幸せそうな冊子が大半です。うちもそうでした。あたりまえです。そんな会社にしたと思うって頑張っているのですから。

しかし、同時に60代の後半に差ししかかった私は、それだけでは物足りないとも思っていました。具体的な形が見えていたわけではありませんが、半世紀にわたって育ててきた会社への私の思いが伝わるものになりたいと思ったのです。すると『本物』という言葉が浮かんできました。あれこれ思いを巡らしました。そして閃いたのです。

「そうだ宮角さんに写真を撮ってもらおう」。

昔、まだ私が20代だったころ、宮角さんはカメラマンであると同時に、三日市の郵便局の前で『フリーポット』という喫茶店を営まれていました。私より4才上の宮角さんと、どこでどうして出会ったのか覚えていませんが、そんなに親しいというわけではないけど、よく話しかけていただいていた。

何年かして、東京に活動の場を移されてからは、お付き合いはありませんでしたが、原爆ドームを背にした、あの『GROUND ZERO 希望の神話』という印象的な写真集を出され活躍されていることは知っていました。

時は過ぎて50代半ばになったころ、ひよっこりお会いすることになりました。

鮮コーポレーションが経営していた『鄙の料亭 地御前』という店で、『じゅんとネネ』のネネさんのライブを催したことがあります。昭和の時代、『愛するってこわい』のヒット曲で一世を風靡した、あの『じゅんとネネ』のネネさんです。その時、そのライブの世話をしていた方と宮角さんがお知り合いで、ライブ会場に顔を出されたのです。そこで「お久しぶりです」ということになりました。しかし、しかし、私の記憶にある宮角さんとはあまりに違いすぎて…。

あの日、私の前に立った宮角さんは、全身黒づくめでした。頭には黒のバンダナを巻き(ご本人はヘッドドレスと言われていました)、僧服というのでしょうか、お坊さんを思わせる黒の袈裟のようなものを身にまとい、首から下げられた銀の鎖のペンダントの先には十字架が鈍く光り、両腕には、これも銀の鎖が巻かれ、髑髏が散りばめられているのです。(メント・モリというらしい。キリスト教の教えで、死を意識することで、傲慢や強欲に耽るわが身を戒めるという意味合いがあるのだとか。)そして足元はこれも黒の皮のブーツ。どこからどう見ても只者ではありません。異端の芸術家というオーラを発散しまくりの宮角さんでした。さらに言えば、一緒にいらっちゃった奥様も、ほぼ同じような出で立ち。お二人が並ばれた様子は、これは、そこだけまったくの異世界。私は、只々「オウオウッ」。

この時、私の脳裏に『芸術家 宮角孝雄』のイメージが刷り込まれました。

あれから10数年たち、私が『本物』という言葉の頭の中で繰り返すうちに、あの時の宮角さんが浮かびあがったのです。「そうだ宮角さんに写真を撮ってもらおう」と。そして、宮角さんは、私が考えた以上に大きな影響を与えてくれました。

しかし、同郷とはいえ、異端の芸術家のオーラ全開の宮角さんに、うちみたいな会社の会社案内を、お願いするのは失礼なんじゃないかという迷いもあり、しばらく何もせず放っていました。が、ほかにいい案もなし。「ええい、まよ」とネットで電話番号を調べ、こうこうで、仕事をお願いしたいのですがと言うと、「あ、いいですよ」とあっさり引き受けていただきました。

何日かして、社長を引き継ぐ龍一と一緒に、新宿の宮角さんのスタジオを訪ねました。

そこでお会いした宮角さんは、出で立ちこそ異端の芸術家でしたが、昔のままの優しい瞳の穏やかな先輩でした。もつとも、仕事を始めると、妥協を許さぬ強い人でしたが。

奥様が大手の広告会社に勤められていて、虎ノ門ヒルズにあるその会社のオフィスでデザイナーとコピーライター(後に私が代わりました)、の方を紹介していただき、『鮮コーポレーション会社案内プロジェクト』なるものが動き始めました。虎ノ門ヒルズの凄いいオフィスでの始動です。なんかこう大掛かりになってきました。おいおい大丈夫か…。

こうして始まった会社案内の作成ですが、次第に、これは社員募集の会社案内の域を超えていつているんじゃないか、そう思い始めました。私と宮角さんが会えば会うほどに立派なものになっていきます。おいおい大丈夫か…。

ついに龍一が言いました。

「父さん、会社案内にしては重たすぎる。もつと、身近で、仕事の内容や待遇がわかりやすいもんにとせんと。学生さんに見てくれんよ。それに、なんぼうかかるんよ」

私も、うすうす感じていました。でも、悪い癖で、良いものを創るのに金がかかるのは当たり前じゃと思うたちなので。見かねた龍一が続けます。

「父さん、会社案内は僕が別に作るけえ、今、作りようんは、父さんの引退事業にしんさい。それなら、自分の作りたいように作りやあええし、あんまり、予算、予算言わんでもええじゃろ」

なるほどな。よし、そうしよう。会社案内には、スナップ写真のような身近なものの方が、よく伝わるよな。もう、今の自分には会社案内は作れん。そう自覚しました。

それからは、水を得た魚。どこまでも、妥協を許さない宮角さんに導かれ写真集は完成しました。

そしてこの写真集は、写真家の登竜門として知られる『A PAアワード2022 広告作品部門』に入賞したのです。

(続く)

